

散させる等の役割を兼ねそなえています。

このたびの美掃工事では、それらの組物や墓股の木口(木の切断面)を白の塗料で塗り直す作業を行っています。工程では、木部全般の長年の埃や煤を丁寧払い、前回修復時(宗祖七百回御遠忌)の塗料をブラシを用いて削ぎ落とし、下地の処理をしていきます。そして、木部の割れやひびなどが見受けられる箇所については埋木をしたり、樹脂を用いた補修を施します。

次に、そのような下地の調整作業が終わった後は、木口の表面に白の塗料を塗っていきます。その際、塗料のムラをなくし、きれいに見えるように二回ほど塗りを繰り返します。

これらの塗料は痛みやすい木口をカビなどの腐朽要因から守る保護材としての役割に加えて、白と木部の



美掃作業前の墓股



繰り返して塗料を塗っていきます



木口塗装を終え、当時の輝きを取り戻しました

色とのコントラストからなる装飾的な面を持っています。また、この他にも虹梁の側面の彫刻部分や破風の内側にある組物にも木口塗装を施します。

ところで通常、伝統的な木造建築物の木口には胡粉塗が施されるもので阿弥陀堂も再建時には胡粉が用いられていました。ところが、御影堂の再建時の組物には塗料として白いペンキが使われてい

ました。開国して間もない、当時の日本でまだまだ未知である材料を使用したのは、当時の棟梁である伊藤平左衛門です。彼の西洋の最先端の建築技術や材料に対する造詣の深さから、組物へのペンキの使用が決定されました。この影響から、五十年前の宗祖七百回御遠忌における修復では両堂ともに木口にペンキが用いられました。

ペンキは、伝統的に使用されて

きた胡粉と同じような耐久性と保護性能がある他、施工性にも優れていることから、両堂のこれまでの百年の歩みを支えてきた有効な仕上げ材であることは間違いありません。

※胡粉：人形の面部などにも使用される日本の伝統的な白色顔料で、石灰質が多いイタボガキという天然カキを風化させたものを磨り潰すなどして製作される。漆や日本画の下地としても使われる。



御修復のあゆみ 伝承された先達の願い

阿弥陀堂縁廻り美掃工事

阿弥陀堂の縁廻りにはさまざまの意匠をこらした匠の技が施されています。虎や龍などの向拝・唐



竹虎の墓股彫刻(阿弥陀堂向拝)

戸筋廻りの「墓股彫刻」、広縁にかけられた「海老虹梁」、そして斗※と肘木※を組み合わせた組物な



海老のように曲がっていることから「海老虹梁」と呼ばれています

どです。

阿弥陀堂は阿弥陀仏の浄土の荘厳をあらわすことから、堂内の華やかな金箔などの仕上げや精緻な彫刻などに特徴があり、複雑で丁

寧な組物にもそのような特徴があらわれています。また、これらの組物は組手を増やし装飾的な要素を増やすとともに、軒を支えたり、梁にかかる上からの荷重を分

